



①西構口(にしかまえぐち)

長崎方面から飯塚宿の入口となるのが西構口です。構口というのは宿場の入り口であって、両端に街路と直角に石垣を築いて短い築地塀を設けたものです。一定の時刻になると門を閉鎖し、長崎奉行や大名の宿泊時などは厳重に警備し、臨時の城郭の役目をしていました。飯塚宿も、入口屋という屋号を持った家があり、町名も向町(むかいまち)といって大名を迎える場所にふさわしいものでありました。飯塚宿の場合、構口はかつては北・南の呼称を使用していましたが、現在は東・西構口と呼んでいます。



②向町観音堂(むかいまちかんのどう)

西構口の正面にある大師堂です。



③大神宮跡・麻生酒造(だいじんぐうあと・あそうしゅぞう)

宝永3年6月、この場所で「元大神」と刻まれた光る石が発見されました。住民はこれを「大神石」と称して祠を建て、曩祖八幡宮の末社として崇め祀ってきました。明治42年(1909)本社の曩祖八幡宮に合祀された後、その神社跡が荒れることを畏れて、神の栄を念じて井戸を掘り、湧き出る清水を利用して神に捧げる酒造りを始めました。銘を「神の栄」とし、量は多くなかったため希少なお酒といわれていました。遠賀川改修工事で飯塚川が廃川同様となり、都市計画により埋立てられた為、井戸も良質な水が得られなくなり約20年前に埋められてしまいました。現在も麻生酒造は「清酒神の栄」を販売しています。

④東町商店街(ひがしまちしょうてんがい)

飯塚宿の長崎街道は現在商店街アーケードに変貌しています。その入口が東町商店街です。飯塚宿の西構口(コスモスコモン側)から嘉穂劇場方面へ伸びる東西の線を主軸とし、途中で三叉をつくって本町商店街に南接します。本町商店街へと続く横断歩道を渡るとすぐに公設市場があり、東に永楽町商店街へと続いています。



⑤白水橋(はくすいばし)

往時の飯塚川はその水源を内野の山中に発し、山口、大分の谷々より流れ出る溪流を集めて、この白水橋で飯塚の宿場を横切り、片島にその下流を配していました。水運の便もよく現在の3倍の川幅を有し、陸路と水路の立体交差点として繁栄しました。飯塚川は遠賀川の改修工事に伴い、大正8年頃から埋立が進められ川幅が狭くなっていき、昭和50年頃完全に埋立てられました。現在はよかもん通りから緑道公園と続いています。橋が架かっていた場所には欄干の一部が残されています。



⑥飯塚本町商店街(いづかほんまちしょうてんがい)

飯塚本町商店街は、飯塚市中心部にある長崎街道飯塚宿の街道筋がそのままアーケードになった広域型商店街です。江戸時代、長崎より小倉へと続く長崎街道の宿場町、飯塚宿として栄えてきました。



⑦勢屯り跡(せいだまりあと)

この上にあった上茶屋から、宿泊した大名が降りて来てここで行列の体制を整えていました。大名の行列は通常、宿場や主だった街道沿いの場所でのみ勢を整え、後は早足で移動していました。「お江戸日本橋」の歌にあるように、「七つだち(午前四時頃)」に出立することも珍しい事ではなく、参勤交代の費用を減らすため、本陣に到着する時間も午後八時頃となるケースもあったようです。



⑧和光山 寂定院 明正寺(わこうざん じゃくじょういん みょうしょうじ)

浄土真宗本願寺派の寺院。明正寺の過去帖には幕府に献上の象が通ったことが記してあることから、町の人々は象の寺と呼んでいます。また、明正寺の横が大名の本陣宿だった為に、明正寺の前は勢屯り(せいだまり)でありました。



⑨御茶屋跡(おちややあと)

上茶屋あるいは本陣とも呼ばれていました。寛政17年(1640)に黒田忠之が宿場本陣(上茶屋)を設け、参勤交代の大名や長崎奉行の宿泊所としていました。南に飯塚川をのぞみ、東に宿場の家並みを見おろす要衝(ようしょう)の地で有事の際は城郭の役目も兼ねていました。すぐ北側には宿場代官の御屋敷が続いていました。明治になってからは茶屋の建物を使用して、初代の飯塚小学校が置かれました。現在は飯塚公民館。



⑩飯の山(いいのやま)

飯塚の地名発祥の場所。聖光上人(しょうこうしやうにん)が明星寺開堂供養を行った際、当時この地にあった太養院に人足のまかないを依頼したが、何かの都合で炊いたご飯が沢山あまり、この地に塚のように高く積み上げたので、ここを「飯の塚(いいのつか)」と呼び、これが転じて「飯塚」になったといわれています。聖光上人が明星寺を復興して京都に上ったのは建久8年(1198)の事なので、この起源伝説が正しければ飯塚の地名の発生は鎌倉時代初期にまでさかのぼることになります。また、神功皇后が三韓征伐の折、この地で「何日可逢(いつのひかあうべし)」と述べ



⑪恵比須石跡(えびすいしあと)

本町商店街の旧ダイマルの左前に恵比須石跡の石碑があります。ここから東にのびる通りは「恵比須通り」です。長崎街道が本町筋を通過していた頃、ここに恵比須石がありましたが、その後、曩祖八幡宮の境内に移されました。宿場町の町人は宿場の繁盛を恵比須に求め、飯塚宿も街筋の中心部に恵比須の石像を安置していました。現在、1月10日に十日恵比須がこの地で本町商店街によって盛大に行われています。



⑫郡屋跡(ぐんやあと)

郡屋は代官、下代、大庄屋、庄屋などの会議所で、御茶屋の管理、宿場の治安、大名の送迎等の事務を扱っていました。



⑬住吉宮跡(すみよしぐうあと)

飯塚宿は陸路の要衝(ようしょう)のみならず、ヒラタ船の上下する水運の重要拠点でもありました。寛政7年(1795)市橋小太夫が夢のお告げで石像神体を川底から引き上げ、水神として祭ったと伝えられています。飯塚川に接するこの付近は船頭町で、住吉神社を祭り水路の安全が祈願されました。住吉宮はその後、曩祖八幡宮に合祀されました。境内に植えられた銀杏の大樹は、シメ縄を張り御神木として保護されていましたが、昭和38年飯塚市役所が移転し飯塚郵便局が建設されるに及びその姿を消しました。



⑭森鷗外文学碑(もりおうがいぶんがくひ)

明治34年(1901年)7月5日～6日に飯塚に来た鷗外は、福岡日日新聞(現西日本新聞)に名文と言われる『我をして九州の富人たらしめば』を掲載し、炭坑主たちが贅沢を止め地域の文化振興にその財力を惜しまず尽くすべきと唱えました。安川・松本家が明治専門学校(現九州工業大学)を創設したのは、この文章に深く感銘したからと言われています。伊藤伝右衛門は安川・松本家からの援助を受けた恩を感じていたので、嘉穂技芸学校(現嘉穂東高等学校)創設を思い立ったと推定されます。いずれにしても、明治期の筑豊に鷗外が残した文化の花束は今も脈々と息づいています。





**⑮飯塚山 太養院(いづかさん たいよういん)**  
明正寺の隣にあり曹洞宗の寺院。行基の開山と伝えられ、かつて「飯ノ山」と称する丘にありました。器運山香積寺(きうんざんこうじゃくじ)と号していましたが、慶長5年(1600)黒田長政公の命により今の号に改めました。飯塚御茶屋は明正寺内にありましたが、寛永17年(1640)黒田忠之公が「飯ノ山」の太養院を現在地に移転し、その跡に上茶屋を設けました。本尊は聖観音菩薩坐像で、菩薩の背部に「天平2年(730)庚午の年 行基作」とあるそうです。秘仏で御開帳等なし。その他に十二尊天像、十一面観音像があります。



**⑯松月山 二尊院 真福寺(しょうげつざんにそんいんしんぶくじ)**  
太養院の隣にあり浄土宗鎮西派の寺院。本尊は阿弥陀如来。建久2年(1191)聖光上人が明星寺再興の折、ここに居をかまえ道場としました。その後戦国時代に秋月種実によって焼かれましたが、慶長10年(1605)黒田長政公の帰依により堂宇を再建。この再建時より真福寺と称します。



**⑰黒ポスト(くろぼすと)**  
長崎街道は小倉-長崎間57里を25の宿場町で結ばれておりましたが、幕府の厳しい鎖国令下、長崎は我が国唯一の海外文化流入の窓口でした。明治4年3月に東京-大阪間に近代郵便が開通し、9ヵ月後の12月に小倉-長崎間(長崎街道)に開通しました。長崎に郵便局所(現郵便局)が開所し、街道筋の16宿駅に郵便取扱所が開業しました。この「黒ポスト」は書状集箱(当時木製)を再現し、歴史の際認識と地域の活性化を計り、平成11年4月20日通信記念日に、ゆかりのあるこの地(飯塚宿本町)に設置されたものです。



**⑱中茶屋・からくり時計(なかちや・からくりとけい)**  
長崎街道は山家で薩摩街道と合していた関係上、筑前六宿には「長崎屋」「薩摩屋」と呼ぶ二つの町茶屋(脇本陣)がありました。一般武士の宿泊所で町人の経営になり、ここに中茶屋の「長崎屋」がありました。現在、ここにはからくり時計があります。アーケード街をひときわ賑やかにするからくり時計は10時から18時の毎正時に音楽に合わせて、渡来の象やラクダを献上する為に長崎街道飯塚宿の街道を大名行列が通っていく様子を再現しています。



**⑲問屋場跡(といやばあと)**  
人馬継所(じんばつぎしょ)、問屋(とんや)とも言います。次の宿(木屋瀬、内野)までの人足、馬の継立、貨物輸送を受け持ちました。宿年寄、帳付、馬役などが詰めていました。馬立場も問屋場に隣接して、常備馬のほか助郷制度によって嘉麻・穂波両郡より徴発される馬が繋がっていました。飯塚川に面していたので川舩(かわひらた)も係留されていました。



**⑳舩石(もやいいし)**  
宮町交番前の緑道公園地内に約1mの石柱が2本立っています。飯塚川を上下していた川舩(かわひらた)を繋ぐために使われた石の柱で、もともとは飯塚宿の問屋場と馬立所があった場所近くの川岸にありました。飯塚川べりに多くの舩石がありましたが、この二本石柱だけが残ったのは個人所有物だったからです。平成12年(2000)6月1日に飯塚市の有形民俗文化財に指定されました。



**㉑東構口跡(ひがしかまぐちあと)**  
東構口跡石碑は本町入口の前角(ローソン前)に建っています。博多往還の南側に構口はあり、現石碑の対面に位置していました。飯塚宿の場合、構口はかつては北・南の呼称を使用していましたが、現在は東・西構口と呼んでいます。



**㉒八幡宮(のうそはちまんぐう)**  
祭神は應神天皇、仲哀天皇、神功皇后、武内宿禰の四座で飯塚の産神です。鎮座年不詳ですが、神功皇后三韓よりの帰路、祭壇を設け八幡の神霊を祀り戦捷(せんしょう)報告の祭典を行いました。神功皇后がこの地にて別れを惜む兵士・郷民に「何日可逢(いつのひかあうべし)」と告げたのがこの地を「いつか」と呼ぶようになり飯塚の地名の発祥になったともいわれています。



**㉓寶月樓跡(ほうげつろうあと)**  
八幡宮鳥居前に常屋の古川直道の別荘「寶月樓」がありました。寶月樓は前は通行盛んな街道に面し、裏は飯塚川の清流に臨み、東に関の山・英彦山、北に福智の山並みが遠望できる大変風情のある優雅な建物でした。飯塚の文人墨客がここに集い、特に歌人たちは時代を先取りする精神が旺盛で、後に日本の近代短歌の開拓者として高く評価されるようになる博多の大隈言道(ことみち)を飯塚に招き教えを受けました。大隈言道は嘉永2年(1849)から安政5年(1858)まで10年間、飯塚の門弟の指導を行い歌学の研究に没頭しました。



**㉔中村印刷所(なかむらいんさつしょ)**  
旧飯塚郵便局



**㉕祇園宮(ぎおんぐう)**  
八幡宮境内末社で飯塚祇園祭のご祭神で知られます。境内末社というのは、八幡宮の境内のなかにある別の神様を祀ってある小さなお社(神社)のこと。若光稲荷神社・祇園宮・天満宮・志賀神社・大神宮・住吉神社・水守神社・産乃宮・十日恵比寿社・三日恵比寿社があります。



**㉖若光稲荷神社(わかみついなりにんじや)**  
八幡宮の末社としては祇園宮と共に最も古くから鎮祭されていました。初め「宮の後稲荷社」と称しましたが、大正10年10月10日当稲荷社に伝わる数々の霊験の光がいつまでも若々しく後世に伝わることを希って「若光稲荷神社」と改称し、参道石段を新設。その階段の左に本来「庚申尊天」と彫るべきところを「申庚尊天」と「庚」と「申」を逆にして刻んだ庚申塔があります。建立は明治39年(1906)7月吉日。



**㉗観音寺(かんのんじ)**  
高野山真言宗の寺院。本堂本尊千手観音菩薩。元禄年間高野山本格院の和尚が飯塚に住む信者の願いで住坊に奉安していた弘法大使像を奉持して飯塚宿に來り、庵を設けて地人に与え高野庵と称しました。以後、宮の下の弘法様として尊敬されています。約100年後の寛政の飯塚絵図には高野庵、大師堂が描かれています。



**㉘オランダ屋敷跡(おらんだやしきあと)**  
オランダ人は鎖国時代に通商の特権を得た代償として、江戸初期は毎年、寛政2年(1790)から5年に1回参府して宝物を献上し、世界情勢を報告していました。各地には指定の宿舎がありましたが、飯塚では宿場内の施設ではなく東構口のはずれにオランダ屋敷が造られており、その理由は明らかではありません。長崎街道ではオランダ屋敷と名の付く施設は他の宿場にはないようです。江戸に参府して飯塚宿を往来した外国人として、ケンペル(蘭医)、チチング(オランダ商館長)、ゾーフ(オランダ商館長)、フィッセル(オランダ商館員)、シーボルト(蘭医)などの旅行記録が残っています。

